

古代史散策

No. 110

あすか故京散策 (松寿会40周年記念行事)

NO.002+ 014+ 015の
あすか故京シリーズより再編成

パナソニック電工松寿会
古代史散策部

平成28年11月再編作成

《コース》 全行程 10.4km

1日目 近鉄橿原神宮前駅 =バス=甘樫丘下車—甘樫丘展望台—飛鳥寺—酒船石—亀形石造物—飛鳥宮跡（伝飛鳥板蓋宮跡）—石舞台古墳—飛鳥の宿「祝戸荘」 宿泊・懇親会

（歩行約4.4km）

2日目 祝戸荘—橘寺—亀石—天武・持統天皇陵—鬼の俎・鬼の雪隠—高松塚古墳—壁画館見学・昼食・解散

（歩行約4.3km）、

<オプションコース>高松塚古墳—キトラ古墳—四神の館見学
キトラバス停=バス=近鉄飛鳥駅（オプション含む 約6km）

《 総 説 》

《 飛鳥時代とは 》

年代的に言えば、推古天皇が豊浦宮に即位した6世紀の終りから、元明女帝が和銅3年（710年）に奈良平城京に遷都するまでの約100年間を指すことになる。

この間の歴代天皇は一代ごとに都を移しているが、推古帝とゆらのみやと小墾田宮おほりだのみやを始めとしていずれの宮も飛鳥地域内にあり、この間に飛鳥を離れたのはわずか3人だけであった。

その3人、孝徳天皇の難波宮と天智・弘文天皇の近江大津宮の時代は、両方あわせてもわずか15年に過ぎなかったし、その間も留守官を任命し維持されていて、飛鳥は捨てられていたわけではなかった。

それ故この時代の政治文化の中心は飛鳥にあったといっても過言ではなく、総称して“飛鳥時代”と呼ばれている。

飛鳥時代は、中国・朝鮮からの仏教伝来にともない、古墳時代から脱皮し、新しい文化を発展させた時代であり、政治、経済、社会ともに大変革が試みられ、天皇制律令国家へ飛躍するという意味において、日本国家成立の時代といえることができる。

《 飛ぶ鳥のあすか 》

「あすか」は明日香、飛鳥、安宿の文字も当てられてきた。その内の「明日香」の文字は万葉仮名をあてたことは明白なのであって、安宿、飛鳥をなぜ“あすか”と訓じたか？。考え方として、古朝鮮語の“アスク”は「安住の地」の意であると云い、「安宿」を当て字したのが源流であろう。西南古朝鮮からわが国に渡来して定住した一派の中で、比較的の後から来た（5世紀中頃以降）一団は、百済の王族に率いられたものもあり、優れた高地農耕技術を用いて河内安宿（現羽曳野市上の太子付近）に入植定住する。

彼等は、その先進の知識と技術を駆使して急速にエネルギーを貯え、その内の一派は葛城山塊を東に越えて大和に移り、大和東南台地に先に入植移住した東漢人との^{やまとのあや}摩擦を避けて、現明日香村飛鳥に定住した。先住者から見れば、彼等はまさに渡り鳥であり、その定着の地は渡り鳥が定住した“飛鳥”であった。

《 飛 鳥 川 》

稲淵山中に源を發して稲淵山の裾をまき、蛇行して祝戸で細川を併せ、^{いかづち}雷丘の南西を迂回して藤原京内裏の北西を流れ、末は大和川にそそぐ。

この地に入植した渡来民は、高地農耕に好適なこの川に“しがらみ”を渡して灌漑用としたことであろう。

飛鳥川 しがらみ渡し せかませば
流るる水も のどにかあるらむ

— 柿本人麻呂 —

飛鳥川はしかし“あばれ川”でもあった。近世以降の記録では、度々の氾濫で住民を悩ませた。古代に於いても川上の林の伐採を禁止する詔が発せられている。

この川を巧みに制御し、この地を開いた飛鳥の民の知識と力と富を背景として、更に彼等を官人に登用してわが国の政治文化の旧弊を打破した6, 7世紀の飛鳥は新生の気に充ち充ちた処であったから、朝廷の上下を挙げて、深く彼等の胸中に刻み込まれた飛鳥であり飛鳥川であった。

^{うねめ}采女の 袖吹きかえず 明日香風
都を遠み いたずらに吹く

《 各 説 》

あまかしのおか
【甘樞丘 (148 m)】

明日香村豊浦

蘇我馬子関係図

古くは¹¹垂仁記に、^{はひろしくまかし}葉広熊白樞茂る“^{うまかし さき}甘白樞の前”とあり、
照葉樹林に覆われた聖壇であったろう。出雲^{いずもくにのみやっこむよごと}国造神賀詞に
云う「飛鳥の神奈備」は、この甘樞丘だと云われたが、万葉
集巻13#3266の歌に

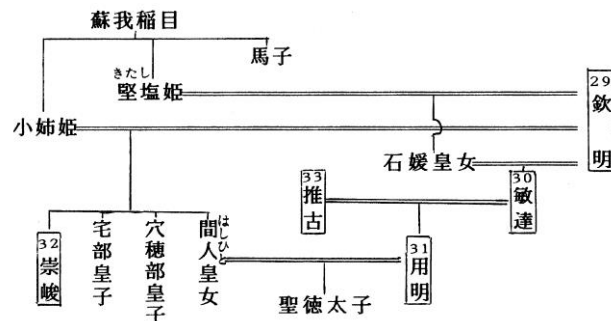
“春去れば 花咲きをおり 秋づけば 丹の穂に
にはふ味酒を 神奈備山の帯にせる 明日香の川の
速き瀬に ……………”

とあり、古代において飛鳥川は、現在のように甘樞丘を 巻
いて流れてはいなかったから、甘樞丘を神奈備とすることに
は疑問が残るのである。

¹⁹ 允恭4年紀：……一の姓が分かれて萬姓となり、乱れ
ていたので「諸氏姓の人等、沐浴齋戒して各々盟神深湯せよ」
「即ち^{うまかしのおか かたまたがへの}味樞丘の辞禍戸^{くがえ}さきに、探湯瓮を据えて、諸人を引き
て赴かしむ」「実(真実)を得ん者は全(無事)からむ。偽(嘘)ら
ば必ず^{そこ}害なわれなむ」と曰う。

³⁵ 皇極女帝3年(644)、蘇我蝦夷・入鹿は、この丘に上宮
門(蝦夷の邸)、谷門(入鹿の邸)を建て並べ、柵をめぐら
し番兵を置き軍備を固めた。

翌年中大兄皇子等による大化のクーデターに、蝦夷は自ら
邸に火を放って焼き払い焼死。蘇我氏の宗家滅ぶ(645)。



592	崇峻	4	蘇我馬子 天皇を弑す	12月推古天皇即位
603	推古	11	冠位十二階制定	
605	〃	12	憲法17条発布	
606	〃	13	聖徳太子 斑鳩宮に移る	
607	〃	14	鞍作止利 金銅大仏(丈六)を飛鳥寺に安置	
608	〃	15	第一回遣隋使(大使 小野妹子) 法隆寺創建	
609	〃	16	妹子 隋使裴世清を伴い帰国 第二回遣隋使	
614	〃	22	第三回遣隋使	
622	〃	30	聖徳太子 薨	
624	〃	32	蘇我馬子 天皇家領地葛城御県を奪わんとす	
626	〃	34	馬子 没 蘇我蝦夷 大臣となる	
628	〃	36	推古天皇 崩御 舒明天皇即位	

【飛鳥寺（法興寺，元興寺）】

明日香村飛鳥

現、真言宗^{あんごいん}安居院。わが国最初の大陸式寺院遺跡跡である。

崇^{すうぶつは}仏派の蘇我稻目は、排仏を主張した物部守屋を攻め滅ぼし、氏寺建立を發願、百濟工人を指導者として仏堂回廊を起こす（³²崇峻 5 年（592）。同年 11 月完。

推古 13 年（605）止利^{どりぶつし}仏師 丈六銅像の鑄造に着手、高句麗^{こうくり}王からも黄金 320 両の喜捨を受け、完成。中金堂に安置。これが今に残る“丈六釈迦座像”である。

皇極 3 年（644）中大兄と鎌足、この庭の槻^{つき}の木の前で蹴鞠の会に出会う。

皇極 4 年（645）板蓋宮に蘇我入鹿を誅した後、直ちに中大兄は飛鳥寺に集合、甘樞丘の蝦夷邸と対峙。

弘文元年（672）壬申の乱には、天武側の大伴^{ふけい}吹負が近江方の使者を斬り、飛鳥寺を占拠。

飛鳥寺の外壁は、厚さ 5 尺（高麗尺 1 尺=1.17 尺…1.8m）とあり、軍事上の重要な拠点なることを意識した、蘇我馬子の遠謀であったことを物語っているのではなかろうか。

私寺の飛鳥寺は官寺に準じた処遇を受け、天武、持

統朝以降、大官大寺、川原寺、薬師寺と共に四大寺に入れられた。その後奈良遷都（710）と共に、七堂伽藍は残して寺名のみを奈良新都に移された。

後、次第に衰え、塔、中金堂は建久 7 年（1192）炎上、大仏のみ焼けただけ丈六の姿を空しく風雨に曝していた。

元禄の頃、大阪の一商人の篤志により仮の本堂が建立され、大仏は露座をまぬかれ今日に到っている。

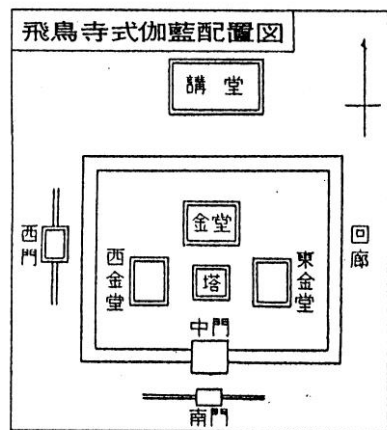
昭和 31—32 年発掘調査。1 塔 3 金堂の形式は、高句麗の清岩里廢寺のプランと同形、門は百濟旧都定林寺の百濟廢寺（平濟塔あり）と一致すると云い、出土瓦も百濟瓦と同形。塔心礎に撒かれた豊富な鎮壇具は、6 世紀後期古墳の副葬品と多く通ずる。昭和 28 年の調査で、寺地の東南に大規模な瓦焼成用の登り窯跡を發見。百濟扶余山に点在する瓦窯跡と同じ形式であり、ここで飛鳥寺の瓦を焼成したのであった。

【亀形石造物】

明日香村村岡

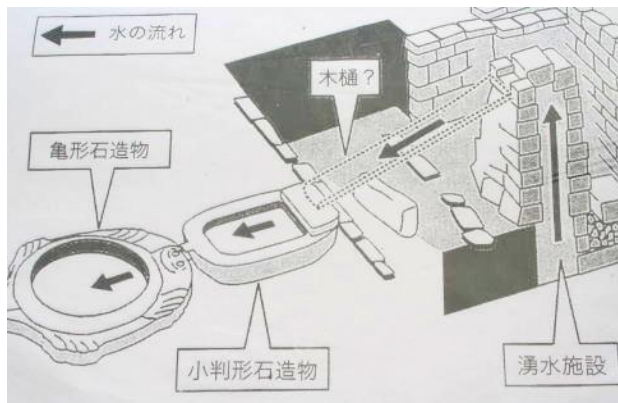
酒船石遺跡の北西に位置する謎の石造物。平成 11 年（1999）に發見された。全長 2.4m、幅 2 m の亀形を呈する。顔を南向きにして据えられていた。丸く彫られた両目、4 本の指の表現が施された両足が特徴的である。甲羅部分は円形の凹型になっており、水を溜める仕組みであったことがわかる。水は鼻の穴から甲羅部分に流れ込み、V 字状に彫り窪められ表現された尻尾の部分から流れ出すようになっている。

亀形石槽のすぐ南側には小判形（船形）に彫り込まれた水槽を有する石造物が、さらに南側にこれら石造物に水を供給していたと思われる湧水施設がみつまっている。斉明天皇が



ふたつきのみや

信仰した道教の世界を表す両槻宮の一部ではないかとか、政治を占う施設とか、身を浄める場所とかさまざまな説がある。出土した土器などから7世紀中頃～10世紀の間にかけて利用されていたことが確認されている。



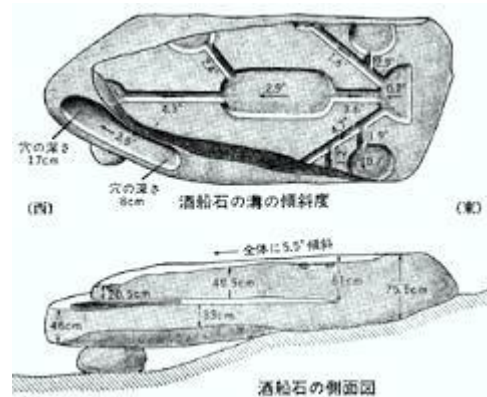
【酒船石】

明日香村岡

明和9年(1772)、飛鳥に杖を引いた本居宣長は、この石を見て、その旅日記(菅笠日記)に「いつなぜこのように石が作られたのか判らぬが、里人は昔長者の酒舟と云い伝えている」と記している。

この石はもともと大きかったものが、近世にはいって高取城を築城する際に大きく割って搬出されたのではないかとの言い伝えがある。近年の発掘調査によって、酒船石のある

丘陵は、裾部に花崗岩を据え、頂部に天理市の石上付近で産出する砂岩の切石を積み上げた「石垣」で取り囲まれていたことが数次にわたる発掘調査によって明らかとなってきた。真の用途は依然謎のまま台地の上に巨大な姿を横たえている。



【飛鳥宮跡(伝飛鳥板蓋宮跡)】

明日香村岡

皇極女帝即位の後、新宮殿造営の詔が発せられ、翌年(643)4月、仮宮殿から飛鳥板蓋宮に遷られた。そのまた翌4年6月12日、大化クーデターが大極殿に於いて起こり、14日³⁶孝徳天皇板蓋宮に即位。

齊明元年(655)年1月3日 皇極太上天皇重祚。その冬、板蓋宮は火災に遭い、川原宮に遷られた。

その後1300年の間、板蓋宮跡は杳として不明のままに過ぎた。昭和29年、農林省の奥吉野総合開発の一貫として、奈良盆地への灌漑用導水路を、飛鳥地区に通ずる計画のあるこ

とを知った、橿原考古学研究所長 末永博士は、全所員を動員して導水路予定地を踏査の結果、飛鳥故京の緊急調査の要を建議。これが容れられて、昭和32年より予備調査が開始さ

れ、幾多の重要埋蔵遺跡のあることがわかり、昭和 35 年以來本格的発掘調査が続けられて、今日に及んでいる。その結果、この地から

昭和 34 年……北側で 一本柱列

〃 35～36 年……井戸跡の南で 建物遺構

〃 39～40 年……井戸跡の西で 建物遺構および井戸跡を発見

〃 41 年以降……140 m に及ぶ大溝跡、敷石遺構と遺物、梁間 11.72 m、桁行 18.5m の建物遺構、木簡若干出土

継続的な発掘調査で飛鳥板蓋宮（皇極天皇）だけでなく、飛鳥岡本宮（舒明天皇）や、飛鳥浄御原宮（天武・持統両天皇）など、複数の宮が断続的に置かれたことが判明し、従来は「伝飛鳥板蓋宮跡」だったが「飛鳥宮跡」に名称変更されている。

【石舞台古墳：国特別史跡】

明日香村島庄

古墳は封土を失い、巨岩を積み上げた石組みの天井石が露出している。昭和 8、10 年の調査で、方墳であることが認められ、上円下方墳であろうと推定されている。

古墳の規模は、一辺 53m の方墳で、封土基底部に丸石の貼石があり、幅約 8 m の空濠、内側に貼石を施した上面約 7 m の外堤を巡らせている。横穴式石室は羨道の長さ 11.5m、南端の幅 2.4m、北端 2.1m、天井石は残っていない。玄室は長さ 7.7m、幅 3.5m、高さ 4.7m、底部一面に割石をしいて床を作り、側壁に沿って幅約 30cm の排水溝を設け、石床の中央を縦に通って羨道中央の側の天井石は約 77t もあると云

われている。調査の時、玄室内部から凝灰岩の家型石棺の破片が発見されており、搬出の時のものと結論されている。また、副葬品として土師器・須恵器の破片が出土している。

日本書紀推古 34 年 5 月(616) 条に「蘇我馬子を桃原墓に葬った」とあり、この古墳ではないかと考えられているが確証はない。

この辺りが「紀」に記された嶋大臣（蘇我馬子）の邸宅があった所と云われ、また、島の宮所在地とも考えられ調査が進められている。

(石舞台の図は 1 2 ページに示す)

~~~~~

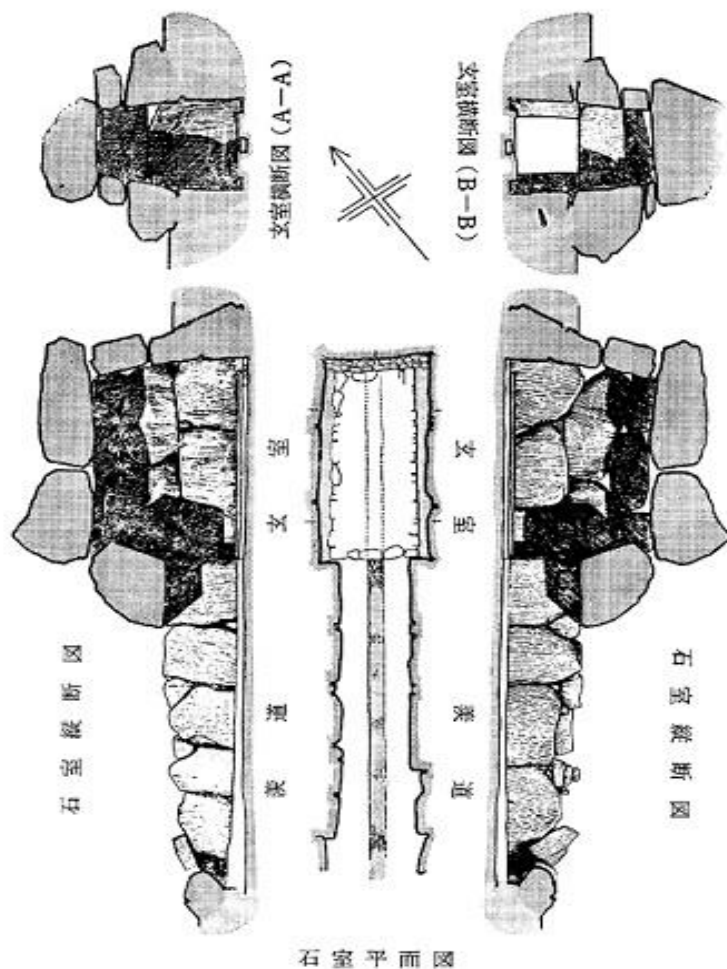
### 【飛鳥の宿「祝戸荘」(飛鳥研修宿泊所)】明日香村祝戸

国営飛鳥歴史公園（祝戸地区）の一角にたたずむ飛鳥研修宿泊所は、昭和 49 年(1974) 3 月開設。

奥飛鳥の棚田が望める絶好のロケーションにあり、山の斜面を利用したロッジ風のスタイルで、万葉ふるさとの風情あふれるくつろぎ空間として、飛鳥観光の拠点、各種研修・セミナーなど多様に利用できる。

平成 19 年(2007)秋に施設の全面改修を行ない、最新の視聴覚機器・ウッドデッキ・大浴場・バリアフリーなど設備を整えて、特に合宿研修には最適な場所である。

「石舞台平面図・縦断図」



「奈良県史蹟記念物調査報告書」による

【橋 寺】

明日香村橋

聖徳太子誕生の地とも太子創建の寺とも伝えるが、これを証明する資料は全くない。天武 9 年 4 月紀に「橋寺の<sup>あまむろ</sup>尼房に失火し 10 房焚く」とあり。さらに天智 5 年銘の<sup>かわちやちゆう</sup>河内野中寺弥勒像から、推古天皇の御代の創建と見てよいと思われる。

昭和 30～31 年の発掘調査により、塔・金堂・中門（現東門の南側）講堂・回廊などの重要施設跡が判明、東面する四天王寺式伽藍配置の 600 高麗尺（約 213m）平方の境内を有する大寺であった。創建時の塔は五重と推定され、心礎に直径 90cm 深サ 90cm の円形穴の三方に添木根受けの半円形穴を有し、柱穴側面に舍利を納める横穴がある。この形式の心礎は、河内野中寺心礎と同じであることは注目に値する。平安時代には、七堂伽藍が<sup>そなわり</sup>具り隆盛だったが、永正 2 年(1505)多武峯寺と争い襲撃されて焼失した。

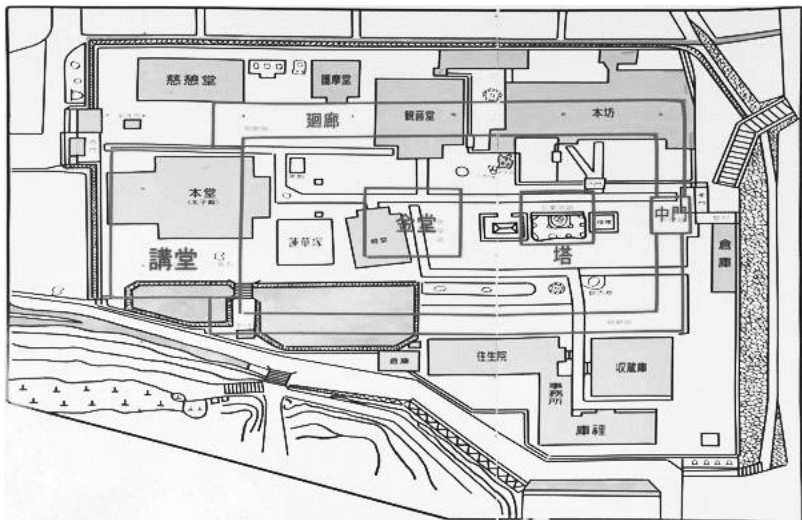
橋寺は前述の如く、天智 5 年(666)には確実に実在し年代の確かさからは飛鳥寺（落慶推古 4 年=596）に次ぐあすか京の古寺であるのに、正史には殆ど現れぬのは何故だろうか。憶測すれば、尼寺のため、政治の表面に出ること少なくて過ぎたのかもしれない。

橋の 寺の長屋に 我がみねし

童女<sup>うないほなり</sup>放髪は 髪あげつらむか

万葉集 卷6 #3822

橘寺境内配置図 現在の施設の上に、  
創建時施設（塔・金堂・中門・講堂・廻廊）を合わせた



【亀石】

明日香村野口

花崗岩質片麻岩の自然石に、亀と思われる彫刻あり、高サ1.2m長サ3.6m巾2.1m。川原寺跡発掘調査の際に調べた結果、下面の東側半分に格子状の彫りがあり、西側は平面に仕上げられてあった。下面が加工され、上面は未加工のままであることは、おそらく転倒させたのであろう。前面の亀様の彫刻は、或いは後の作かとも考えられる。亀石の位置が橘寺北辺の延長線であることは、曰くがあるのかもしれない。

【40天武天皇, 41持統天皇ひのくまのおおうち檜隈大内合葬陵】

明日香村野口

古代天皇陵の中で、被葬者が判明している貴重な御陵。

日本書紀天武朱鳥元年(686)紀「9月9日天皇きよみはら淨御原宮に崩御。持統元年10月22日草壁皇太子等をして大内陵を築かしめ、翌2年11月11日葬る」とあり、後年、鵜野皇后(持統女帝)は大和2年(702)12月22日崩御され、飛鳥岡に火葬し大内陵に合葬された。御陵は南面し、頂上の円墳のみ残存している。

天武天皇(在位 673~686)御名大海人皇子。中大兄(天智)の実弟であり、事実上の皇太子として兄を補佐して豪族支配をしりぞけ、律令政治の確立を計られたのである。

天智即位10年(671)天皇ふよ不豫。死期近きを覚られて、病床に弟大海人皇太子を呼び、皇位を継承する由、勅されたが固辞し、直ちに宮中の仏殿に入り出家、所持の兵器は悉くことごと司つかさに納めて吉野の宮に隠棲。従う者は鵜野皇后の一子で10才の草壁皇子と女官、舎人等数十人。翌日舎人の半数を大津京に返し、ひたすら恭順する。10月17日から20日までの慌ただしい4日間であった。

この年12月3日天智崩御。大友皇子は直ちにせんそ踐祚されたのであろう。皇后倭姫との間に皇子なくこれが大津京の悲劇の始まりであった。伊賀のうねめやかこ妾女宅子の生んだ大友皇子は、その母が卑母なるが故に皇位継承の資格はなかった。にも拘らず